

草魚と亀

この戯曲は福島県会津若松市の鶴ヶ城と飯盛山、二つの地点によって再現される。飯盛山は白虎隊が自刃した地として知られており、彼らは鶴ヶ城から煙が上がるのを落城したと誤認し決行に至ったと言われている。観光客たちはその視線を借りて飯盛山から鶴ヶ城を望む。また多くの観光客は鶴ヶ城と飯盛山の両方を訪れるので、鶴ヶ城から飯盛山も望むことになる。つまり、二つの地点は“鶴ヶ城の天守閣”と“飯盛山の白虎隊自刃の地”とで、視線を交わしている。飯盛山からの視線は前述したように白虎隊の視線である。では鶴ヶ城からの視線は誰の視線なのだろうか。白虎隊が飯盛山から鶴ヶ城を見たとき、誰かがこちらを見つめ返していたのだろうか。何かうっかりした拍子にさっきまで向こう側にいた自分の残像が、今度は自分を見返しているかもしれない。シーンは入れ替え可能。登場人物は男女兼任可能。

鶴ヶ城の登場人物（男3女5）

たくや（児童）
さくら（児童）
ゆい（児童）
美月（小学校教師）

光子（観光客）
謙二（観光客）
秀子（観光客）

おじさん

飯盛山の登場人物（男6女7）

幸雄（観光客）
正彦（観光客）
文昭（観光客）
松江（観光客）

俊哉（地元の人）
頼子（観光客）
明美（観光客）

直子（高校教師）
佳奈（修学旅行生）
美優（修学旅行生）

作業員 1,2

エスカレーターのアナウンス

飯盛山入り口

アナウンス「飯盛山へようこそお越しくございました。ただいま山の上までエスカレーターでご案内しております。どうぞエスカレーターをお使いくださいませ。歩いたら本当に大変でございます。ただいま山の上までエスカレーターでご案内しております。どうぞエスカレーターをお使いくださいませ。いらっしゃいませ、どうぞエスカレーターをお使いください」

人々がエスカレーターで山頂へと移動する。階段を使う者もいる。お参りをするという行為においてエスカレーターを使うことに何か後ろめたさのようなものを感じるのかもしれない。

白虎隊の墓

エスカレーターを降り、階段を上ると広場に出る。そこには白虎隊の墓の他に戊辰戦争にまつわる慰霊碑がいくつか建っている。人々がお墓に手を合わせている。屋外にあるのでそこまでの静けさはない。墓には花が供えられ線香の煙が立ち込めている。線香を持ち込む者もいる。修学旅行生から、お年寄り、外国人と様々な人がこの地を訪れる。

白虎隊自刃の地

白虎隊の墓がある広場から右手の階段を降りると、白虎隊唯一の生き残り飯沼貞吉（いぬまさだきち）の墓がある。さらに階段を降りると、白虎隊自刃の地に辿り着く。会津若松が眼下に広がっている。背後には鶴ヶ城の方向を眺めるように少年隊士の像が、右横には慰霊碑と看板が建てられている。観光客たちは絶えずやってくる。彼らは背後の像や慰霊碑を見た後、会津の町並みに鶴ヶ城を探す。その際手がかりとなるのは少年隊士の像が指差す方向と、偶然なのかかわからないが、鶴ヶ城の前に建てられた“ポール”である。

山の斜面には市民の墓が広がっている。年を取った二人の作業員が階段に座り込み、階段のアスファルトの欠けた部分を補修している。それが終わると彼らは立ち上がり、土嚢をお墓の方へ運んだり、シャベルで土を整えたりしている。彼らは重心が低く、まるで（実際そうだろうが）ずっとそこにいたかのように落ち着いている。彼らは観光客と比べて粗野で動きが鈍い。

作業員 1 「あとこれだけだから、これだけだから」

作業員 2 「おう」

観光客、慰霊碑や看板を見物している。飯沼貞吉についての会話。

幸雄 「一人生きてた、墓んどこ（に書いてた）」

正彦 「え？」

幸雄 「一人生きてた」

文昭 「あー、一人生き残ったんだっけ？」

松江 「そう、えーつとね、なんつったけかな、20人のうちの一人なの」

鶴ヶ城を探す観光客。彼らにとって大切なことは何よりも“鶴ヶ城が見えるか見えないか”であるが、お年寄りにとってこれは結構難しい。確かに白虎隊が生きていた時代は城よりも高い建物はなかったはずである。

幸雄「やっぱり見えるんだよな、これな、ね、見えるんだよな」
正彦「あの一林の方かな」
幸雄「あ、城が見えるじゃん、ほら、あのポールの下が城だ。ポールが見えるでしょ」
正彦「あーあーあー」
幸雄「あの手前が城だから」
正彦「あーあの森がー」
幸雄「真ん中あたり森の中、うん」
正彦「ああ、そうかそうかそうかそうか」
文昭「鶴ヶ城」
幸雄「うん。ほらポールが見えるでしょ、まっすぐに、あの手前がそうだがね」
松江「あーそうだそうだ、あれがそうだ」

松江「わかった、（文昭に説明をする）そこに大きな、あの一なんだ？あれが、マンションがあるでしょ、その隣に平べったい家（うち）があるでしょ、その、ちょっと行ったら山でしょ、その上にある」
文昭「上にか？あーそうか、うん」
正彦「注意して見ないとわかんない」
松江「ポールの、ポールの下」
文昭「黒いあれが見えるから、あれかなって思ってたんだ」
松江「ポールの下」
文昭「……城が見えるわ」
幸雄「あれは目印のために建てたんじゃないか？」
松江「そうかもしれないね、はははは。あのポールの下だって」
文昭「なんか意味があるんだな、目印」
幸雄「目印だ、そうだ」
松江「ポールの下だ」
正彦「そうかそうかそうか」
松江「下がお城なの」
正彦「この向きだ」
文昭「うん、向きだからおかしいなーって改めてさ」
松江「こっから見えるんだよね、（少年隊士の像を確認して）こっから見てるもん、ほら」
幸雄「あーそうかそうか」
正彦「眺めてね、望んで」
幸雄「城が燃えてるって言ってね」
松江「そうそう、みんなでね」
正彦「こんな歴史があるとはなー」
幸雄「じゃあ行きましょうか」

慰霊碑の賽銭箱を横目にからかい合う観光客。

幸雄「高木建設の社長、入れたかい？ここへ。お賽銭を。『浄財』って書いてある」
正彦「浄財っていうとこ、違うとこにあるんだよ。まだ、そこまで行ってないんだ」
幸雄「心の中か？！心の中、ははははは」
正彦「違う違う、あの一違う、向こうの方にあるんだ、また。足元気を付けて」

観光客と修学旅行生がすれ違う。修学旅行生は観光客それぞれに対して挨拶をする。礼儀正しい。

佳奈、美優「こんにちはー」

観光客「こんにちはー」

佳奈「あ、見えた」

美優「どこ？」

佳奈「あの森みたいになってるとこの真ん中あたり」

美優「さざえ堂行く？」

佳奈「うん、行かないの？」

美優「行く行く、栗まんじゅう食いたい」

佳奈「よし、行こう、さざえ堂。先生待ってるよ」

美優「ねえ、こっちからじゃないの？」

佳奈「そっちからじゃないと思うよー」

さざえ堂

さざえ堂は高さ約 16m、六角形の木造のお堂である。その中を修学旅行生や観光客がぐるぐると回る。行きは右回り、帰りは左回り。行きと帰りですれ違わないような作りとなっている。血気盛んな男子中学生たちはドタドタとその中を走り回る。

戸ノ口堰洞穴前

猪苗代湖の水を会津若松に引くために掘られたという戸ノ口堰洞穴（とのぐちせきどうけつ）。戸ノ口原の戦いに破れた白虎隊士がここを通過して飯盛山に辿り着いた。その横にある小さな巖島神社にお参りをする修学旅行生、見守る直子。白虎隊が隠れていたという洞穴を見て写メを撮る二人。観光客が見物をしている。水の音がする。空気が通っている。

直子「今これ、猪苗代（いなわしろ）から流れて来てるんだよ」

佳奈「え、そうなんですか？」

直子「そう、繋がってるんだよ」

直子「（看板をなぞって）ほらほら、こうやってきたんだよ」

佳奈「え、すごい」

直子「ずーって」

美優「え、え、え、すご」

直子「そうなんだよ、ここ、ずーっと通ってきたの」

佳奈「すご」

直子「そうなんだよ」

佳奈「あそこに隠れてた、逃げてきたってことですよ？」

直子「そうそうそうそう」

佳奈「でここで」

直子「ここで自決したんだよね、上んところで。今だとわかるけどさー昔は道なき道だったのにねえ、よく来ましたよねー」

鶴ヶ城、天守閣へ続く階段

鶴ヶ城には戊辰戦争にまつわる展示がいくつもあり、当然ながら白虎隊に関する展示もある。隊士たちの顔パネルが年齢などのプロフィールとともに展示されている。

光子「若いね 15 歳だもんね」

謙二「凛々しいよなー俺らこれくらいのとき何してたかわかんない」

光子「ふにゃふにゃしてるのいないもん」

天守閣へと足を進める二人。彼らを待っていたかのように秀子が窓から外を眺めている。ツバメが天守閣の軒先に巣を作ろうとしているのだ。

秀子「そこに巣を作ろうと餌をさ」

光子「わーほんとだ」

謙二「何？」

秀子「どこに巣を作ろうかって。巣を作ろうと藁をさ」

光子「啜えてる」

謙二「あー、でもお城の天守閣に作るって豪勢だな」

光子「見つかつちゃうと困るからね。お城なら安心だ」

鶴ヶ城、天守閣の内部

さらに階段を上がると天守閣の内部に入る。部屋の作りは正方形になっており、東西南北の案内図が四方の窓の上部に貼られている。

秀子「飯盛山、なだらかな山なんだね」

謙二「飯盛山、なだらかな山なんだな」

光子「飯盛山」

秀子「（上の案内図を見て）あ、だって、ほら、ちょうどそこの、この辺にある……あ、ほら、この辺の方向って書いてあるじゃん！」

光子「あーあったあった」

秀子「だからそれで出てさ、あれ（双眼鏡）で見れば、見えるんだよね。だけど風の影響で」

謙二「あ、出れるわけではない？」

秀子「あーでも行けるか。行ける行ける」

鶴ヶ城、芝生広場

一同、ドアを開けて外に出る。眼下の芝生広場で遊ぶ児童たちの声が一気に聞こえてくる。

謙二「騒がしいな、幼稚園かな」

たくや「先生お弁当ありまーす」

さくら「りあちゃんは？」

ゆい「いたよ」

さくら「ねえなんでこないのー！」

さくら「あれ、りあちゃんは？」

ゆい 「あ、きたきたきたー。おーいおーいおーい」
さくら 「りあちゃんおそいー」

さくら 「あーもー、はなちゃんこないー」
ゆい 「あーもー、みーちゃんこないー」

たくや 「おりゃおりゃおりゃおりゃおりゃおりゃー」

たくや 「あ、はなちゃんきた」
さくら 「はなちゃーん」
ゆい 「松坂先生、みーちゃん知らない？」
美月 「来るよ、今来るから待ってね」
ゆい 「みーちゃんきたー」

美月 「はーい、小さい順になるよー。4組さーん、5組さーん、6組さーん。4組さーん、4組さーん、4組さーん、4組さーん！」

鶴ヶ城、天守閣

飯盛山の方向を確認する一同。

秀子 「東、こっちにあんだよ」

光子 「あれかな、方向的に」
譲二 「そうそう」

秀子、備え付けの双眼鏡で見る。

クラスの人数を確認する美月。

美月 「にーしーろーはーとお、にーしーろーはーとお、にーしーろーはーとお。はーい、スタートするよー」

美月が先導して廊下橋の方へ移動する。移動する最中も児童たちは騒がしい。

白虎隊自刃の地

地元の老人が観光客に城の場所を教えている。

俊哉 「その松の木と松の木の間、その真ん中、林の中にニョキニョキニョキって見えるでしょ」

頼子 「あー！マンションの高いのがあって、その5分の2くらいのところ」

俊哉 「そーですね」

明美 「5分の2？」

頼子 「うん。その、ちょっと、木がずーっとう列に並んでるところのー」

明美 「あ！見える見える、見えるお城。ポールが高く立ってる、そのー」

俊哉 「そうですね、ポールが立ってるけど、ラジオ局の。昔は、私小さい頃はここ全部田んぼ」

頼子「あーここ、あれだけが」
俊哉「こんなに家（うち）なかったんですよ」
頼子「うわー、今じゃこうやって探すけど」
俊哉「大変ですよ」

頼子「ありがとうございました」
明美「ありがとうございました」
俊哉「いえいえ」
頼子「教えていただいてよかった」
明美「ね」
頼子「（教えてもらわないと）見えなかった」

頼子「じゃあ、そこまで行って」
明美「……さざえ堂は？」

頼子「すみません、さざえ堂どこですかー？」
俊哉「はい？あ、さざえ堂、逆逆、逆ですよー」

鶴ヶ城の本丸と二ノ丸を結ぶ廊下橋

おじさんが橋の下のお堀を見ている。そこへ児童たちを引き連れた美月がやってくる。

おじさん「お城の主（ぬし）、主いますよ。1メートル30」

児童たちの大歓声。

児童たち「すごーい！」
児童たち「すごーい！」
児童たち「ねえ、みんな声でっかい」

美月「わーすごいのいるー」

児童たち「でか！」
児童たち「でかい！」
児童たち「でかいでかいでかい！」
児童たち「でかーい！」
児童たち「主、主だー！」

おじさん「あれはね鯉科であって鯉じゃありません」
美月「それじゃあなんなんですか？」
おじさん「よく見ると口ひげがありませんので」

児童たち「先生ー！」
児童たち「嘘ー！主！」
児童たち「主、主……主！」

おじさん「草の魚と書いて草魚（そうぎょ）、1300年前に日本に来ました。その子孫です」

美月「すごーい」
児童たち「あれ鯉じゃないんだ、鯉科なんだ」
おじさん「よーく見るとね、口ひげないから」

おじさん「あれ、なかなか見れないんですよ」
美月「なかなか見れないんだってー」

美月「見た？」
児童たち「うん、めっちゃでっかいドジョウ」

おじさん「それでね、そっちに亀いるよ」

児童たちの歓声は止まない。

児童たち「え、どこ？亀いるって。あ、いたいたいた！」
児童たち「先生亀いるよー！」
児童たち「亀だー！」
児童たち「先生ー亀もいまーす！」
児童たち「亀ー亀いるー！」
児童たち「亀だー！」
児童たち「亀いたー！」
児童たち「先生亀もいまーす！」
美月「うん、見ましたー！」

草魚と亀への歓声は続く

(了)